

21世紀のオリimpiズム構築のための基礎的研究 (2)

Fundamental Studies for Reconstruction of Olympism in 21. Century.

山 本 徳 郎

Tokuro YAMAMOTO

はじめに

この研究は、昨年度に引き続き、継続してなされている。昨年度の成果は「所報」第22巻(95-102頁)に報告されているが、その原稿締め切り後の2月に2回目の研究会を開催していたので、本報告の後半にその内容を示しておいた。

なお、本年度の研究成果については、同じタイトルでなされている科学研究費補助金による研究成果の報告書に記載されるので概略にとどめる。

本年度の研究概略

本年度はアテネでオリンピック大会が開催された関係で、オリンピックやオリimpiズムに関する言説が大量に流布していた。

行動としては、6月23日のオリンピック・デーにちなんで行われた「『オリンピック休戦』の呼びかけを日本から」という試みは画期的であった。これは「日本スポーツ学会」の発案になるもので、報告者も呼びかけ人の一人に加えていただいた。加わった意図は、この内容が「21世紀のオリimpiズム構築」の中心柱になる内容だと考えたからである。

今年は中国の学会に参加する機会を得た。2008年のオリンピック開催を控え、北京の周辺の変化

は著しいものがあつた。これに対して地方の研究者の間にはややさめた見方もうかがえ、興味深く感じられた。歴史研究の分野では、6月に蹴鞠研究会が開催され、サッカーの原点は中国だという主張を表明していた。その成果は解維俊主編『足球起源地探索』(中华书局、2004年9月発行)にまとめられているようである。

12月に鹿屋体育大学でアジア地区のICHPER-SDの大会が開催された。アジア地区の関係者と、21世紀のアジアのオリimpiズムについて、意見交換をすることができた。もっともこの大会に参加するメンバーの多くは欧米志向が強いように感じられ、21世紀のオリimpiズムをアジアから発信しようという発想は、残念ながら希薄であつたと感じられた。

9月に、スイス・ローザンヌのIOCの研究センターと博物館を訪問した。目的は、オリimpiズム研究の総本山ともいえるこれらの施設の活動状況を把握し、今後の研究に必要な情報を得ることにあつた。研究センターならびに博物館は歴史教育を重視したクーベルタンの意思を精神的に引き継いでおり、彼が残した史料を数多く収蔵しているので、今後の研究に生かしたい。

なお、この中の資料室で、嘉納治五郎のクーベルタンに宛てた手紙と、クーベルタンがヒトラーに宛てた手紙のオリジナルを見ることができ、コ

ピーさせてもらえたことは一つの収穫であった。

以下は、2004年2月20日に国士舘大学で行われた「21世紀のオリimpiズム構築のための基礎的研究」の、2003年度第2回目の研究会報告である。したがって前号の所報（第22）の同テーマの内容の続きである。

まず、かつてクーベルタンをめぐる問題で学位（博士）を取得し、現在立命館大学等で非常勤講師をしている小石原美保氏に講演をお願いした内容を示し、参加して下さった森川貞夫氏（日本体育大学教授）、水谷豊氏（桐朋芸術短期大学教授）、西村美佳氏（国士舘大学体育研究所特別研究員）のコメントを掲載した。最後に全体の総括を小石原氏と清水重勇氏（神戸大学名誉教授）にお願いした。（山本徳郎）

戦前・戦後の日本の児童書（児童向け読み物）におけるオリimpiズム

報告者：小石原 美保

はじめに

21世紀のオリimpiズム構築のための基礎的研究の一環として2003年11月27日に清水重勇先生を講師に招いて国士舘大学で行われた研究会に参加し、「21世紀のオリimpiズム？——クーベルタンに訊く」というテーマでお話をうかがった。オリimpiズムという概念をどう理解すべきか、またその理解をスポーツの未来に向けどのようなかたちで継承していくべきなのか、改めて原点のクーベルタンに立ち返る機会を与えていただいたことで多くの示唆を得たように思う。とりわけ、クーベルタンがその思索の過程においてオリimpiズムという概念をさまざまな方向から意味づけ、「オリimpiズムとは、体系ではなく精神のあり方である。」「オリimpiズムとは若者をもて静かで自信ある人間にする儀式である。」「オリimpiズムは高貴さと道徳的純粋さの学校であり、同時に身体的持久とエネルギーの学校である。」といった定義によって、人間性の開花をうながすその教育的

意義を強調していたことにあらためて目を見開かされる思いがした。このように言葉を置き換えてみることで、クーベルタン自身オリimpiズムという思想を練り直していたのであり、またオリimpiズムとは何かを広く世間にアピールしていくための言論活動という実践に取り組んでいたのだとも言える。

20世紀初頭、1910年代から20年代にかけて模索されたオリimpiズムは、クーベルタンの固有の意味において「《知》と《身体》の統合的形成」（清水）を志向するものであった。言い換えればこの概念は、思考と実践の統合を志向するものであった。それは、青少年にとってのスポーツの教育的意義を探求する思想形成であると同時に、その思想を大衆化する手立てを模索しながら国際協調と友愛の実践に具現されたのである。このようなオリimpiズムという概念の多義性、複合性に改めて目を向けてみると、次代をになう世代にその概念を語り継ぐ行為もまた、まぎれもなくオリimpiズムの一側面であるように思われる。

さらに、西欧を発祥とするこの概念が広く認知されていくために、すなわち非西欧世界に受け入れられていくために言説が果たした役割にも目を向けてみる必要がある。積み重ねられた歴史や、政治的社会的文化的背景の相違がもたらす距離が介在してもなお、オリimpiズムの放つメッセージの普遍性にクーベルタンは大いなる期待を寄せたのであり、それに触発された多くの人々がさらなる言説の送り手、語り部としてそのメッセージを忠実に翻訳し、あるいは異文化圏のなかで咀嚼し、解釈して伝えようとした。そのような広い意味で教育的（啓蒙的）動機から出発する言説が読者に受容されること、そうした対話的關係それ自体にもオリimpiズムが表象されているとはいえないだろうか。

異なる文化圏のあいだに成立する対話、異なる世代間に成立する対話を、オリimpiズムについて語る、記述する、伝える、読む、理解する、共鳴するといった言説を介した実践のなかで実現させ

ることもクーベルタンの構想に含まれていたとすれば、それがどの程度まで実現されたのかを検証することも、21世紀のオリビズムを構築するうえで不可欠ではないだろうか。清水先生のお話をうかがいながらそのようなことに思いを巡らせた。

こうした思いを出発点に、本報告では、非西欧世界に住む我々が、オリンピックという外来文化をその意義や思想的支柱も含めて受容してきた過程において、とくにその初期の段階でオリビズムが子どもたちにどのように語られたのか、またその後現在に至るまで児童向けのオリビズムの言説はいかなる変遷をとげていったのかを概観してみることにはしたい。

戦前のおもな児童雑誌におけるオリンピック関連記事(読み物)をめぐって

周知のとおり、クーベルタンの提唱による近代オリンピック第1回大会は、1896年にアテネで開催された。外来文化としてのオリンピックが日本において紹介されるのははやくも1897年で、総合時事雑誌『世界之日本』において「昨年のオリムピア競技」と題し、クーベルタンがアメリカの文芸雑誌に寄稿した英文のアテネ大会報告記事が抄訳されて掲載されている。この記事はオリビズムの明確な説明部分が省かれているものの、実際の競技会の様子を伝える部分が翻訳されたことで、オリンピックへの親近感や国際競技会への日本の参加に向けて期待感を高めることに貢献した。しかし、より直接的にオリビズムの理解をうながすものとしては、鳥谷部春汀による「體育界の偉人クベルタン」(『中学世界』1903年11月)や、大森平蔵による「希臘競技の復興」(『體育』1905年5月)といった言説が20世紀に入ってから登場するのを待つことになる。(日本体育学会体育史専門分科会2002年春の定例研究集会、和田浩一氏口頭発表、——「昨年のオリムピア競技」『世界之日本』(1897年2月)とクーベルタンのオリビズム——による。)この時期の言説は、オ

リビズムの理解を促すことよりも、まずオリンピック競技会の具体的な実施状況について知らせるという時事的関心にこたえる内容を優先している。その際、雑誌というメディアは、その啓蒙的報道的性格によって、このような言説を紹介する場として適していたということがいえるであろう。

児童向け雑誌(ここでは小学校高学年から中学校低学年の学齢層を読者対象とするものを指す)にオリンピック関連記事が初めてあらわれるのはいつ頃であろうか。報告者がこの時代の4つの代表的児童雑誌、『少年世界』(発行所博文館、発行期間1895-1933)、『少年倶楽部』(大日本雄辨会講談社、1914-1962)、『少女倶楽部』(大日本雄辨会講談社、1923-1962)、『少女の友』(実業之日本社、1908-1955)のオリンピック大会が行われた年ごとの記事内容を検索した結果をまず報告したい。

日本人選手が初参加した1912年の第5回ストックホルム大会以降、オリンピックに寄せる国民の関心は次第に高まっていったと考えられる。オリンピックという言葉は、雑誌記事や新聞報道などを通じ国際的スポーツ競技会を指すものとしてある程度社会的認知を得ていたと思われ、児童向け雑誌の読者である子どもたちにもそれと同程度にはこの言葉が普及していたことがうかがわれる。たとえば1916年10月発行の『少年世界』では、「東洋オリンピック大会」がこの競技会のために東京、芝浦につくられた競技場の写真掲載によって紹介されている。1916年は第一次世界大戦のためにオリンピック第6回大会は中止されたが、極東の限られた地域の国々で行われる小規模な国際競技会にもオリンピックの名が冠せられて年ごとに開催地を変えながら行われていた。広々とした競技場の光景とこの言葉のもつ響きは当時の少年読者たちに新しい身体運動文化の到来を感じさせたのではないだろうか。また、1920年の第7回アントワープ大会が開催された年と、その2年後の1922年には、『少年倶楽部』が新年号付録にそれぞれ、「オリンピック大競争双六」、「卓上オリ

ピック大会」を企画している。これらの年の『少年倶楽部』の記事内容について未確認なため、今後それらについても確認する必要があるが、少なくともこうしたボードゲーム付録にも「オリンピック」という言葉が冠せられている背景には、ゴールを競う盤上ゲームの本来持つ遊戯性に当時最新のスポーツイベントとしての「オリンピック」の響きを与え、読者である子どもたちに目新しさを喚起することは、出版戦略的にもきわめて妥当だとする時代の空気があったことがうかがえる。さらにそうした一種の広告的機能によって、「オリンピック」という言葉は、この時期の大衆児童文化の興隆の動きにも加速されて、子どもたちが外来スポーツ文化になじんでいく素地をつくりだす役割を担っていたといえるのではないだろうか。

より詳細で具体的な言説としてのオリンピック関連記事が登場するのは、報告者が確認できたかぎりでは1928年の『少年世界』10、11月号に掲載された「オリンピック大会写真画報」が最初である。この年は第9回大会がアムステルダムで行われ、織田幹雄が陸上競技の三段跳びで、鶴田義行が水上競技の平泳ぎで日本人選手として初めて金メダル獲得の快挙を成し遂げた。また、オリンピック関連記事が児童向け雑誌にこぞって登場するようになるのは、1932年の第10回ロサンゼルス大会からである。オリンピックのラジオ放送も開始され、日本人選手の世界のひのき舞台での活躍に国民が大きな関心を寄せたこの大会で、日本は金メダルを7個獲得の大躍進を遂げた。児童向け雑誌では、「オリンピック記念帖」（『少年世界』1932年10月）、「熱血オリンピック記念号」（『少年倶楽部』1932年10月）、「オリンピック写真だより」（『少女倶楽部』1932年9月）、「オリンピックの歴史」（『少女の友』1932年9月）などの特集ページが生まれ、グラビアページで華やかな国際競技会の舞台や日本人選手の勇姿が視覚的な情報として伝えられる一方、実際の選手たちの活躍がその努力をたたえつつノンフィクション的言説によって

再現されている。そのなかでも『少女の友』に掲載された「オリンピックの歴史」は、当時の東京朝日新聞運動部長、山田午郎が執筆したもので、児童向け雑誌におけるオリビズムの初期の言説として注目される。

さらにその4年後の1936年第11回ベルリン大会の際には、次の12回大会開催地が東京に決定した経緯もあり、従来の写真画報のような報道色のオリンピック特集ばかりでなく、オリンピック大会招致を受けて読者である子どもたちにオリンピックの意義やスポーツの大舞台にのぞむ心構えを説く言説（「来れオリビズム」『少女の友』1936年10月）、すなわち、よりジャーナリスティックな内容のオリビズムの言説も登場している。また、翌年の1937年6月号の『少年倶楽部』には「スポーツ感激座談会」と題して、ベルリン大会の実況放送を担当したアナウンサーたちと、スポーツに造詣の深い詩人、物語作家として知られ『少年倶楽部』にもたびたび執筆しているサトウ・ハチローの4人が、かつてのスポーツの名勝負や、ベルリン大会のエピソードを披露しながら、スポーツマンのありかたについて語り合っている。ここでは、勝負にのみ固執せず、たとえ自分達に有利なジャッジが出て、正直、公正であろうとするスポーツマンとしての態度が賞讃され、オリンピックの舞台に限らず、スポーツの試合において正々堂々と闘うことの重要性が強調されている。そこには、オリビズムの言説がスポーツマンシップの言説を内包しているのを見ることが出来る。そこには、大柄な外国の選手たちのなかで気圧されることなく毅然とした態度で試合にのぞむ日本人選手の気概を、これからの社会を担うべき子どもたちにも涵養するという言説の送り手側の意図もこめられているのである。

先に述べたようにこれらの言説が登場してきた時期は、大衆児童文化興隆の時期に重なっており、児童向け雑誌それ自体が「面白くてためになる」をキャッチフレーズに、教化性と娯楽性の二面性を標榜しながら独自の児童向け読み物のジャンル

を形成していた。その点では、はなやかな国際競技会の雰囲気を与えつつ、スポーツマンのモラルを少年少女読者に説く事も忘れないオリimpiックの言説は、このジャンルの格好のコンテンツであったともいえよう。

単行本におけるオリimpiズムの言説

次に単行本におけるオリimpiズムの言説についてみていきたい。確認できたかぎりでは1936年に出版された2つの児童書がオリimpiズムの言説の単行本における初出である。ひとつは、新潮社発行の日本少国民文庫シリーズ第11巻として刊行された飛田穂州・豊島与志雄編『スポーツと冒険物語』所収の「オリimpiック物語」であり、もうひとつは学藝社発行の鈴木良徳著『少年オリimpiック読本』である。2冊オリimpiズムの児童書(児童向け読み物)が出版された背景には、やはりオリimpiック大会の東京招致決定が影響しているといえるであろう。東洋ではじめてオリimpiック大会を受け入れる国として、子どもたちを含む若い世代にもオリimpiックの理念についての理解をうながす啓蒙書を普及させることは、社会的要請にこたえるものでもあるからである。

これらの単行本のオリimpiズムの言説は、さきに紹介した少女向け雑誌『少女の友』に掲載されたコラム「オリimpiックの歴史」(1932年9月号)同様、古代オリimpiック競技の話からはじまり、これをクーベルタンが近代オリimpiックとして復興した経緯、その根底に流れていた彼のスポーツ教育思想、オリimpiックに託した意義などを紹介している。また、日本が参加するようになってからの各大会における日本人選手の活躍も紹介する構成になっている。

とくにオリimpiズムの言説に関しては、両言説とも「現代之オリimpiック主義とは何ぞ。人生の主眼とするところは戦ふといふこと、そのものにあつて、勝利を得ることは第二の問題であると思ふ。従つて最も肝要なことは、勝つか、負けるかといふことではなくて、どうすれば立派に戦ふこ

とが出来るといふことにあるのである」(『スポーツと冒険物語』p.13)、「オリimpiック競技で一番重要なものは、競技に勝つと云ふことではなくて、大會に参加すると云ふことである。之は恰度人生にとって最も重要なことは成功することではなくて、物事に努力することと同じである。」(『少年オリimpiック読本』p.3)にみられるように、クーベルタンがオリimpiック競技の精神として述べた言葉を翻訳したものが、それぞれの執筆者によって紹介されている。本の体裁をなしたオリimpiズムの言説としてのひな型が、この2冊の児童書によってつくられたといえるのではないだろうか。

しかし、日中戦争が勃発し、急速に戦時体制下へと移行していく社会的情勢のなかで、日本はオリimpiック開催辞退を余儀なくされ、市民生活そのものが国家の管理下におかれるなかで、外来スポーツそのものも敵視されることになった。また、児童文化についても統制傾向が強まり、管理団体としての少国民文化協会発足後には、言論統制によってオリimpiズムの言説も戦中の空白期間を迎えることになる。このような一連の言説の背景の変化は、初版から3度の改訂を重ねた少国民文庫シリーズの変遷にもみてとることができる。『スポーツと冒険物語』は1943年に『武道・運動・冒険物語』として改訂版が出されたが、広瀬謙三が執筆を担当した「オリimpiック物語」の部分はすべて割愛され、かわつて武道に関する内容がもりこまれた。しかし戦後の1949年に出された『スポーツと冒険もの語り』では、再び「オリimpiックもの語り」が同じ執筆者の手によって加筆され復活している。

戦後のオリimpiズム関連の児童書とみなされるものを国際子ども図書館の児童書総合目録から検索したところ、42点の著作を抽出できた。これらの児童向けオリimpiズムの言説に共通の傾向としてみられるものはおよそ以下のとおりである。まず、古代オリimpiック競技祭と近代オリimpiックの復興という歴史的経緯について解説し、子どもた

ちに異文化理解をうながす言説としての役割をになっていること。そのなかでは近代オリンピックを復興したクーベルタンの功績もたたえられ、彼が近代オリンピックを復興するに至った過程を伝えることは、そのままオリンピックの理念の解説にもつながっている。執筆者が啓蒙的教育的配慮に基づいてオリンピックの理念、精神を翻訳した言説ともいえる。さらに、これにオリンピック大会での実際の選手たちの活躍談が加えられる。とりわけ努力のあかしの生きた証拠ともいえる日本選手の活躍は、美談というかたちで神話化されている。また、数字として残された記録の一覧が付加される場合が多く、こうした記録がスポーツの世界のリアリズムを伝えるとともに、言説それ自体にもリアリズムを保証する役割を果たしている。まとめてみるとこれらの言説には、ジャーナリズム的側面（報道性とノンフィクション性）と啓蒙書の講話的側面の二面性を指摘できるであろう。それによって異文化への知的好奇心をほりおこしつつ、国際社会の中で日本人としてスポーツの世界でどういう態度をとるべきか、努力、あきらめないことの大切さ、スポーツを通じて培われる公正さ、協同の精神、育まれる友情など実話をもとに語り聞かせ、子どもの向上心を刺激する言説スタイルが形成されているといえる。

こうした言説の書き手たちは、新聞記者か、書き手自身がオリンピックに参加したことのある元選手である場合が多い。とくに戦前、あるいは戦後まもない時期の言説の執筆者には、その両方のキャリアを兼ね備えた人物（鈴木良徳、織田幹雄、大島鎌吉、人見絹枝など）が多い。そこには、大学まで進み学業のかたわら学生スポーツに打ち込む事の出来る経済的にも知的環境にも恵まれた階層の出身者が、この時代のオリンピック大会の主力メンバーであったという社会的背景があるだろう。彼等はスポーツマンとしての実体験と言説を紡ぎ出す能力の両方において、オリビズムの語り部としての必要かつ十分な条件を満たした書き手たちであったともいえる。

雑誌に掲載された言説も含め一連の著作を出版年ごとに一覧にしてみると、3つの出版ブームのあることがわかる。最初のブームは、日本人選手がオリンピック大会で活躍するようになった昭和初期である。この時期は主として児童向け雑誌がオリビズムを伝える役割を果たしているが、近代的なるもの（モダンなもの）としての異文化であるオリビズムを理解し、受容することを読者である子どもたちに促す時期であったと考えられる。昭和初期の「スポーツ狂時代」、結果的に返上することになったものの、オリンピック東京大会への期待感の高まりもその背景にはあったと考えられる。いわば児童向け読み物におけるオリビズム醸成期ともいえるであろう。

次の出版ブームは、第二次世界大戦の敗戦を経験し、改めて平和の意味がクローズアップされることになった戦後まもない昭和20年代である。敗戦のショックからたちなおるためのきっかけ、国民に明日への活力を与えてくれるものを求めようとする時勢のなかで、改めて国際平和と友好をうたうオリビズムの理念が浮上する。戦争当事国として参加資格を奪われ1948年のロンドン大会に招待されなかった日本が、次の1952年大会より復帰できることになったことも、言説によるオリビズムの再評価を後押ししたといえるであろう。平和な時代であるからこそ人々がスポーツを楽しむこと、オリンピックを通じて国際社会に復帰できたことへの執筆者たちの万感の思いや喜びが、この時期に出版された児童書の言説にはもりこまれている。

そして1964年、日本ではじめてオリンピックが開催されることになり、大会を成功させるためにも国民こぞって盛り上げていこうという意味で、昭和30年代後半にキャンペーンブックとでもいべき多くの児童向けのオリンピック関連図書が出版されている。たとえば、1962年に出版されたオリンピック青年協議会編『少年少女のためのオリンピックの話』（ベースボールマガジン社）には、オリンピック招致運動への協力ばかりでなく、常

日頃から少年少女にオリンピック運動を啓発していこうとする編者たちの意図が明らかであるし、1965年に刊行された全5巻からなる『少年少女東京オリンピック全集』（黎明書房）は、各巻「もえる聖火」、「美しい人間像」、「みんなの力で」、「新しい科学の勝利」、「未来への行進」のタイトルが掲げられ、それぞれに専門的知識をもった執筆者たちの手によってオリンピックの理念が解説されているばかりでなく、スポーツの祭典を支える人的ネットワークや最新鋭の設備を備えた競技場など、ソフト・ハードの両面についてもあますところなく紹介されている。東京オリンピック大会開催を記念したこれらの企画出版があいついだこの時期は、言い換えれば児童書におけるオリンピズム強化期とでもいえるであろう。

3つの出版ブームには、いずれもそれぞれの時代背景の要請に応じて書かれた言説の登場とその特徴をみることができるのである。

まとめにかえて

オリンピズム関連の言説を探して現代の児童書に目を向けてみると、そこにはあきらかな言説の衰退をみることができるといえる。東京オリンピック大会以降も、啓蒙書的な役割をになう言説は、近々の大会での日本人選手の活躍や記録の更新など新しい情報を加えながら定期的に企画出版されている。しかし、テレビという電波メディアの送り届ける映像を通じて、いまやオリンピックを一種のスペクタクルとして受容し、リアルタイムでスポーツの迫力や勝負の醍醐味を味わうことの可能になった現代の子どもたちには、活字（児童書）を通してオリンピックの理念を理解する必要性はもはや感じられ得なくなっているように思われる。あるいは、大人の書き手たちが、言説を通じてオリンピズムを伝える、語り継ごうとする切実さを感じ得なくなっていて久しいのかもしれない。クーベルタンが20世紀の初頭に掲げた壮大な理念はいつしか風化してしまっているように思われる。オリンピックそのものも肥大化し、商業主義の拡大、

招致競争の熾烈化、ドーピングの横行など決して良い方向とばかりはいえない方向に変質してしまったことはつとに指摘されている。21世紀を迎えたいま、オリンピックの行方を見据え、自分たちの手で身体運動文化の豊かな土壌をつくりあげる精神を育てるためにも、改めて言説を通じてオリンピズムを再構築し、次の世代に語りかけていくことが求められているのではないだろうか。

小石原美保さんの講演へのコメント

森川 貞夫

いつも国士舘大学での「21世紀のオリンピズム」講演会を楽しみにしています。今回も小石原さんの「戦前・戦後の日本の児童書におけるオリンピズム」と題した講演にあらためてオリンピック研究への刺激を受けました。したがって以下のメモ風のコメントは私への研究課題ということをふくめて受けとめてくだされば幸いです。

一番気になったことは「児童書（児童向け読み物）」の「読み手」と「書き手」の問題、さらにこの二者の関係です。先ず「読み手」ですが、どのような「階層」の子どもが読むのか、あるいは親に買ってもらって読むのでしょうか（学校の図書室等で借りて読むのもありますが、その場合は読者層）。とくに戦前には児童書を買うとか児童向け雑誌を定期購読できる児童はかなり限定されていたと思われます。したがって「書き手」としては当然ながらある種のバイアスをかけながら「読み手」を想定して書くのでしょうか、その場合はどのようなオリンピックあるいはオリンピズム「言説」をつくりあげていったのでしょうか。この両者の関係から紡ぎ出される「オリンピック言説」はどのようなものか、またそこから何を讀みとれるのでしょうか。

今の問題に関連していますが、単なる珍しいイベントが世界にあるよという「紹介」もしくは報道記事ではなくて、いわゆる「オリンピック物」

の文章で当時の記者、あるいはスポーツマンは何を伝えていたのかの分析も気になります。それは「オリンピックと平和」（スポーツと平和）神話、あるいは国家によるストーリー（かつてのスポーツ選手たちはすべて「国家の代表」選手としてオリンピックに出場していた）から個人のストーリーへの「転換」（あるいは逆転）はあったのかなかったのか（人見絹枝は「国家と個人」（ヨーロッパ的な感覚も承知していただければ彼女は相当に悩んでいました。『ゴールに入る』参照）。そういう意味では例え「児童読み物」であってもそれを通しての「国民国家」（小国民というのもありました）の形成はどのようにしておこなわれたのでしょうか。

私の記憶ではフェアプレー、スポーツマンシップに関しての「美談」（竹中選手がコースを譲ったとか、テニスの清水選手がこけたチルデン選手のために緩い山なりのボールを返したとか）、大江・西田の「友情のメダル」、孫選手のオリンピック金メダル獲得などが印象に残っていますが、それを読んだのは小学校の国語教科書であったように思います。

「前畑がんばれ」と「ワンダフル人見」（オリンピック女子800メートルに初めて出場し2位になった人見だけがレースの過酷さでヨーロッパの選手がみんなゴールした途端に仰向けに倒れるのに彼女だけはグランドにうつ伏せになったので観客がなんと大和撫子は優雅のことよと賞賛したとかいう）にまつわる「言説」は先の国家のストーリーからもジェンダー論からも分析可能なテーマだと思います。いずれにしてもそれらの「読み物」は「児童」対象にどのような教育効果（教化？）をもたらしたのでしょうか？

本来なら朝鮮籍である孫孫禎のオリンピックマラソン「日本人初の金メダル」獲得というのは二重の意味でエスニック・ハラスメントともいえる内容をふくんでいますが、如何でしょうか。その点では斎藤尚子さんのジュニア・ノンフクション『消えた国旗』（岩崎書店、1966年、後に小学校国

語副読本『はぐるま』に採用）は大事なオリンピック読み物であり、外すわけにはいかない「作品」だと思います。子どもにどう伝えるかは、岩波ブックレットの山本典人『日の丸抹消事件を授業する』が一番いいと私は思います。

児童書における「オリビズム」の内容上の特質と時代区分との関連も気になります。大雑把ですが、大正ロマンから「15年戦争」時期、戦後、今日という流れは実にさまざまな事柄が錯綜しています。仮に縦糸を時代の流れにとるとしても横軸に何をもってくるのか、分析枠組みが問われます。それはいくつぐらいの分析視点を小石原さんが想定しておられるのかに係っていますが、もし私ならという想定では川本信正さんの『スポーツ賛歌』（岩波ジュニア新書、1981年）のオリンピックに関わるものはすべてはずせないものです。

最後に、私的なお願いですが、サトウ・ハチローの詩で「スポーツというものは」というのがあります。6節からなる詩ですが、おそらくこれは戦後すぐの時期に書かれたものかと思います。最後の節は「スポーツマンシップ／それは美しい輝きがある／やさしとさわやかさがある／すこやかな匂いがある／わたしはその匂いをさわやかさを輝きを／しんそくから愛している／なによりもなによりも愛している」です。きっとこの詩は戦後すぐのアメリカ教育使節団がアメリカ的「民主主義の生活の方法」としてスポーツを賞賛・推奨した「遺産」かと思いますが、当時のオリビズムはこのようなスポーツ観ではなかったかと思います。おそらくこうした「神話」言説がその後も引き継がれてきているのではないかと思います。このサトウの出典は残念ながらわかりません。こうした「言説」がその後、どう変わっていったのかもふくめて別の機会に教示していただければ幸いです。

小石原美保先生のご発表をお聞きして…

水谷 豊

1. ご発表題目の『戦前・戦後の日本の児童書
(児童向け読み物)におけるオリimpiム』

自体がすでに興味深く、長くスポーツ文学の研究に取り組んでおられる先生の面目躍如たるものをまず感じた。そして、ご発表の目的とされた「オリimpiズムが子どもたちにどのように語られてきたのか(どのように受容されてきたのか)をたどってみる」も先生ならではの実に新鮮な視点であった。合わせて、準備された資料も貴重な情報提供の役割を存分に果たした。

2. 先生の「まとめ」の文章はこうであった。

電波メディアの送り届ける映像を通じてオリimpiック競技会をリアルタイムで目にするのできる現代の子どもたちは、活字(児童書)を通してオリimpiックの理念を理解する必要性をもう感じない、あるいは大人の書き手たちがオリimpiズムを語る切実さを感じ得なくなっているといえるのかもしれない。オリimpiックそのものも肥大化し変質。これがまた言い得て妙で、私感としてはつぎのように聞き取った。

電波メディアの送り届ける映像を通じてオリimpiック競技会をリアルタイムで目にするのできる現代の人びとは、活字(言説)を通してオリimpiックの理念を理解する必要性をもう感じない、あるいは現代の書き手たちがオリimpiズムを語る切実さを感じ得なくなっているといえるのかもしれない。オリimpiックそのものも肥大化し変質。

オリimpiックの歩みをメディアの観点からちょっと大雑把に顧みると、こういうことが思い浮かぶ。すなわち、オリimpiックは初め『活字(—先生が言う‘言説’)の時代』ではなかったか。もっぱら、その意義や歴史、各競技における選手の

活躍の様子、国際事情などについての諸々の著]によって私たちはオリimpiックに対する理解と認識を深めた。言うならば、オリimpiックについての“啓蒙”ではなかったか。それが大会の実相に「音」を通じてライブで触れる『ラジオの時代』を経て、『テレビの時代』に変わった。

つまり、「聴」に加えてリアルタイムで「視」ができるようになった。金メダルを獲得した選手の吐く息がまだ荒いうちに優勝までの競技分析、心境などについて選手自身が語るのを画面から見聞できる臨場感を味わえるようになった。かくして、「活字」は後追いの情報となった。グローバルに送り込まれてくる「ライブ映像」をいながら目の当たりにする時代の到来である。そして、オリimpiックは国際的ビジネス戦力を有する有力企業(スポンサー)のコマーシャル商品と化した。これがアマチュアとプロの融合に拍車をかけ、競技そのものが遂に“世界の一大スポーツショー”あるいは“ワールドワイド・エンターテインメント”と変貌した。先生はこれを(上記のように)「オリimpiックそのものも肥大化し変質」と表現した。言ってみるならば、「読んで学ぶ」から「見て学ぶ」に変移した。こうなると、こんにちの「活字」の価値はもはや初期のころとはまったく変わる。

3. しかしながら、つぎのような文章は「活字」だからこそ意味があり、その価値は後世いつまでもずっと受け継がれていくにちがいない。それは(たかが新聞社によるものではあるが)日本が初めて参加したオリimpiック・ストックホルム大会(1912年)のひとつの“総括”とみることができるからだ。

我選手の競争振

△人気すこぶる大にして

△大喝采を博したり

ストックホルム特電＝日本選手金栗、三島の両氏は今回のオリimpiック競争に於て月桂冠を得る望みは少なけれども、とにかく初め

て日本が世界の競争舞台に出でし為の人気のこぶる大にして各国代表者の行列に加わりし日本人はことに大喝采を博せり。米国及び欧州各国の運動家は多くの経験と練習とを積める為非常に日本選手よりも有利なる地位に立てり。然れども日本選手の特徴ある競争振を見れば十分錬磨の功を積む時は次回のオリンピック大会には能く勝利を占め得る望みあり。

(朝日新聞・明治45年7月15日)

つぎに示す文章はクーベルタンの自著の一節である。日本の参加についてどのような印象を持っていたのか、興味津々たるものがある。

日本人は1912年からしかオリンピック競技会に参加していないが、姿を見せるや否や彼らはそれまでヨーロッパが常に勝利をおさめてきたいくつかの種目でまったく恐るべき力を示している。彼らには国技があり、それについていろいろ伝えられ、大戦前の数年、ロンドンやパリでは大変ポピュラーになってきているようだ…… (後略)。

(クーベルタン原典翻訳ブック・in Bulletin du B.I.P.S., Lausanne[1933], no.9, p.11-13)

つまり、このような「言説」は時代を経てもその研究資料的価値はいささかも色あせることなく、逆に、益々貴重さを増していくにちがいない。テレビやシネマによって「オリンピック」を保存していく容易さは明々白々だ。だが、このような「言説」によって「オリンピック」を保存していくことにはテレビやシネマにはない、それらとは異なる『語りかけ』(思考)の深さがある。この意味において、オリimpiズムの「流行」の視点からの有利さはテレビやシネマに譲るとしても、「不易」にあたるものを継承していくための「言説」が担う『語り部』としての使命はかぎりなく重い。

4. と同時に、オリンピックが4年ごとの開催を絶やさないかぎり、時代の推移とともに付随する「オリimpiズム」の変容もまた不可避で

はないか。つぎに示すのはその一例であろう。銘記しておきたい。

The International Olympic Committee is resolved to ensure that the environment becomes the third dimension of Olympicism, the first and second being sport and culture."

(- Former IOC President Juan Antonio Samaranch)

「戦前・戦後の日本の児童書(児童向け読み物)におけるオリimpiズム」を聴講して

西村 美佳

オリンピックという言葉やその意味、成り立ちなど全く知らなくても、テレビなどの映像を通じてオリンピックを「何となく知る」ことができる今日において、戦前・戦後の日本の児童書を資料として、つまり言葉を通じて「オリimpiズムが子どもたちにどのように語られてきたのかをたどってみる」ことを目的とされた小石原先生のご講演は新鮮で、とても興味深いものでした。先生のご講演を深く理解するほどには到底至らない不勉強な私ですが、特に印象深かった点について感想のようなことを書かせていただきたいと思います。

〈児童書における教育性と娯楽性について〉

先生は、オリンピックを紹介した戦前の主要なメディアとしての児童雑誌が、新しさとソフトさを感じさせる写真と日本人選手の活躍というノンフィクション性を加えて、読者である子どもたちに刺激を与えていたこと、そして①教育性(国民教化)と②娯楽性という児童雑誌の重要な二つの要因を共存させるのに最も好ましい題材がオリンピックではなかったかと指摘されていました。児童書と言えども、日本人選手の活躍を華々しく写真付きで子どもに伝えていたという事実には驚きました。また、大人向けの人気雑誌にはオリimpi

クについてどのように描かれているのか、児童書における描かれ方とは異なるのか興味を覚えました。

〈戦前の児童書において語られるオリimpiズムについて〉

戦前のおもな児童雑誌として、先生は資料として「少年世界」、「少年倶楽部」、「少女倶楽部」、「少女の友」を挙げておられました。これらの雑誌の中でオリimpiックに関する言説をピックアップされた資料（主に当日配布いただいた資料3）を読ませていただきながら、私は「少年」へ向けられたオリimpiズムに関する言説と「少女」へ向けられたオリimpiズムの言説の違いに興味を覚えました。特に少年へ向けられた言説が「真の運動魂」（「少年倶楽部」19巻8号、1932年）、「脚と腰まで死ぬまで自分は跳ぶんだ」（「少年世界」、38巻10号、1932年）という幾分激しい内容であるのに対して、少女に向けては「女子のスポーツについて注意せねばならないことは、男子とちがって女子のスポーツには女子としてのやり方がある」として、「程よい練習をして楽しく時間を過ごすうちに知らず知らず健康な身体を育てることこそ、オリimpiックの精神です」、「朗らかに楽しく東京オリimpiックを迎えたいものです」（いずれも「少女の友」29巻10号、1936年）など「楽しく、朗らかに、程よく」という表現がよく用いられているようでした。これは、戦前の日本社会の男女観を背景とする時代的特徴なのか、あるいはクーベルタンの考え方の中にもこのような男女観が見られるのかなど興味を覚えました。

〈「教育的執筆動機から出発する語り」について〉

子どもに向けて語るオリimpiック、オリimpiズムは「教育的執筆動機から出発する語り」であるという先生のお話には考えることが多々ありました。これは先生のお話のまとめとも結びつく重要なポイントに思われました。先生はまとめとして、「電波メディアの送り届ける映像を通じてオリ

ピック競技会をリアルタイムで目にするのでできる現代の子どもたちは、活字（児童書）を通してオリimpiックの理念を理解する必要性をもちや感じない、あるいは大人の書き手たちがオリimpiズムを語る切実さを感じ得なくなっているといえるのかもしれない」と締めくくられました。確かに現代の子どもは、かつてのように活字からではなく、電波メディアや漫画を通じて視覚的に、そしてある種容易にオリimpiックとは何であるのかを「知る」ことができるようになっていたことを改めて感じさせられました。メディアは、オリimpiック大会に日本人選手が出場する度に、記録の数値、メダルの色、メダルの数に激しく一喜一憂をしており、子どもの中にはそのようにメダルの有無に激しく反応するメディアの流す情報や雰囲気、好む好まざるに関わらず流れ込んでいます。そして子どもは、オリimpiックにおいては勝つこと、1位になること、メダルを取ること、全人未踏の記録を残すことこそが大切なことなのだと認識させられているような気がします。そんな今の子どもたちに、オリimpiックの創始者クーベルタンは「参加することに意義がある」、「勝敗にこだわらな」というオリimpiックの目的を掲げたのだと書かれた児童書を読ませたとしたらどのように感じるのだろうかと思いました。そういう意味において、電波メディアはオリimpiックというものの「現実」を良くも悪くもストレートに、また残酷に子どもたちに伝えてしまうものであると改めて感じました。大人たちが子どもたちへの「教育的語りかけ」をほとんど諦めてしまったように思われる今日、もう一度子どもたちに向けて「理想」としてのオリimpiズムについて懸命に「言葉で」語りかけてみたいと思ってしまいました。ひたすら自分の興味・関心の赴くままに書き連ねてしまいましたが、本当に様々なことを考えさせていただけたご講演でした。

児童向け読み物からみるオリンピズム

小石原 美保

「戦前・戦後の日本の児童書（児童向け読み物）におけるオリンピズム」と題する報告をおこなってまもなく、聴講された3人の先生がたから今後の研究活動への貴重な指針を含むコメントを頂戴しました。いただいたコメントから得た示唆と、この報告をどのようにひとつの研究成果にまとめいくかという今後の展望をめぐって、改めて今私なりに考えていることを記してみたいと思います。

○児童書の「教育性」と「娯楽性」、そしてコンテンツとしての「オリンピズム」

児童文学、児童向け読み物の書き手が執筆の出発点において動機としてもつものに、子どもをひきつける「面白さ」と子どもの「ためになる」内容の両方があること、とりわけ戦前（大正から昭和初期）の大衆児童文化興隆の流れのなかで生まれた一連の児童向け雑誌には、そのどちらに重きを置くかに比率の差はあれ、各誌がこの「教育性」と「娯楽性」を共存させていたことに注目したうえで、オリンピズムはその格好のコンテンツではなかったかということ報告では指摘しました。つまりそれは、オリンピックの理念が放つ「教育性」が啓蒙的言説を形成する役割を果たす一方、オリンピックが表象する外来スポーツのモダンな香りやスポーツそれ自体がもつ遊戯性が、一種の「娯楽性」としてグラビアページや試合を再現するノンフィクション的言説に転写され、読む楽しみのなかに回収されていくという点で、オリンピックというテーマが児童向け読み物においてメタフィクション的役割を果たしているのではないかということです。児童向け言説がもつ「教育性」と「娯楽性」、言説として語られる内容（ここではオリンピック）のもつ「教育性」と「娯楽性」、この相同関係をときほぐすことで、逆に「児童向

け読み物（児童文学）」、「オリンピズム」というジャンルあるいは概念の双方をあらたな視角からとらえなおすことも可能になるのではないかと、もう少し具体的に言えば、児童文学研究においては「児童書における身体・スポーツのテーマ」、また体育・スポーツ学研究においては「言説からみえる身体運動文化」というように、それぞれの領域でこれまで見過ごされてきた課題や試みられることのなかった視座を設定することで見えてくるものがあるのではないかと、そんな漠然としたものではありますが手応えを感じています。

その際に、「読み手」と「書き手」との関係、「読み手」の階層の問題、「書き手」の階層やそこに存在するなごしかのバイアスが言説に与えた影響についても目を向けていかねばならないこと、ある意味で「教育性」（教化性）をもつ言説の最たるものとして国語教科書や道徳教材テキストに採用されたオリンピズムの言説を見落としてはならないことを、森川先生のご指摘からは重要な示唆として得ました。「何をどう語っているか」ということとともに、「それがどう読まれたのか」という「書き手」と「読み手」との間の関係、影響の送りあいを、双方向のベクトルとしてとらえ、その方向や線分の長さを検証することが研究者の視点として要求されてくることを強く感じました。

また、読者がオリンピズムを受容することにおいて「教育性」と「娯楽性」がどのような意味を持つのかについても、常に批判的精神、ある意味で懐疑的視点をもって追求していくことが必要だとも感じました。「教育」ということに内包された崇高な理念やその具体的な実践の努力に敬意を払う一方で、そこに権力による国民教化の意図が入り込んでいなかったかどうかを改めて問うてみることは、当該言説をとりまく時代背景や国家との連関も含め研究者にとって大切なイメージーションであることを示唆していただいたと思います。オリンピックに日本人選手が出場するようになったことは国際社会のなかでの日本という国家

像を描く場がひとつ増えたことでもあり、その際に国家に対する他者から視線を意識する言説がさまざまな場で展開されていることは、水谷先生より提示していただいた朝日新聞の記事にもその一例をみることができます。このような活字言説が果たした国民教化的役割がオリimpiズムの受容にどのように影響したのか、さらに大人向けの言説が児童向けの言説にどの程度まで反映されているのかも興味深い問題です。

それは「娯楽性」においても同様で、「教育性」と必ずしもわかりやすい二項対置でとらえられるものではないことを認識した上で、文化の受容、浸透、変容の過程において「娯楽性」というものが果たした役割を検討しなければならないと感じました。

○ジェンダー論的視点を介在させること

西村さんからもコメントをいただいたオリimpiズムをめぐる少年向け言説と少女向け言説の内容やトーンの相違（とくに戦前の児童向け雑誌に顕著）は、一連の資料を渉猟した際の筆者にとっても新鮮な驚きでした。この対象とする読者を性別区分することが、戦後のオリimpiズム言説において「少年少女」というかたちで一括りにされていく流れは、ジェンダー学や女性スポーツ史の観点からも考えてみるべき興味深い問題だと考えています。オリimpiックやスポーツの世界における女性進出の加速と言説の書き手、読み手におけるジェンダー観の転換は連動しており、言説の変遷にはそれが如実にあらわれているからです。児童向け言説の送り手の編集方針や書き手の執筆動機にも、そして受け取る側の読み方にもそれぞれ時代や社会状況を反映したジェンダー観が刷り込まれていることに留意しておかねばならず、その影響の度合いを検討する意義もあると思っています。言説の送り手が少女読者にオリimpiックの何を伝えるべきだと感じているのか、それが少女読者をどの程度教化しあるいは強化しなかったのか、また越境（女子も積極的にスポーツをやる）

を促すものになりえたのかどうかという視点を介在させることで、ひとつのオリimpiズムテキスト論を展開することは可能だと思います。

また資料に目をとおしていくなかでは、同じ「少女向け雑誌」でも「娯楽性」の強い『少女倶楽部』、「啓蒙性」の強い『少女の友』という性格の違い、報告ではふれませんでした。同時代の児童向け雑誌『少年少女譚海』にはオリimpiック関連の言説や記事がまったく掲載されていないなどの発見もありました。同じジャンルでも異なる編集路線をみていくと、スポーツを語る方法の多様化が大衆児童文化におけるスポーツの占める位置の拡大と同時進行しているさまが浮かび上がってくるように思います。グラビアページの目新しさやユーモアの味付けでスポーツを語ることによって読者を引きつけるのか、評論性重視の硬派の路線をとるのか、それとも誌面にとりあげないのか、そして読者層はそれらの各誌の特徴からどれを愛読し、支持するのか、これもやはり「書き手」と「読み手」との関係をみることに帰着するのかもしれないませんが、そこにジェンダーの視点を介在させると、「少年向け」雑誌の言説との共通点と相違点、それらを根底で支えている思想的背景もいっそう鮮明に見えてくる気がします。

○時代区分の問題と言説の変遷

オリimpiズムの言説の変遷をとらえる上で、オリimpiズム関連児童書の出版状況から大雑把に戦前のオリimpiズム醸成期、戦後まもなくのオリimpiズム再評価期、東京オリimpiック前後のオリimpiズム強化期という3つのブームを指摘しました。このような時代区分には森川先生のご指摘にもあるとおり、分析の枠組みになにをもってくるのが非常に重要になります。筆者自身この3つの時代区分が非常にラフなものであることは承知していて、今後この時代区分をいちおうの指標としながらその設定を慎重に修正し、描き直す作業を行っていかねばならないと感じています。

そのなかでひとつ関心をもっているのは、オリ

ンピズムの言説の児童書における表出の多様化です。とくに戦後に出された単行本に関してみると、ほとんどが「小学生学習文庫」、「精選学校図書館全集」、「中学生全集」などの叢書のなかに組み込まれており、個人や家庭向けというよりはどちらかといえば図書館や学級文庫に常備されるべき一冊として出版されていることがわかります。これは先に述べた児童書の「教育性」の問題にも関わってくるのですが、さらにオリンピック関連児童書が、オリンピックの歴史（古代オリンピックと近代オリンピック）、オリンピックの理念の解説、競技会の概要（競技種目の紹介など）、各大会での記録、選手や試合のエピソード紹介、写真資料の挿入というかたちをいちおうのひな形としてきたのが、時代を経るにしたがい、オリンピックの理念の解説部分を圧縮したよりビジュアルな百科事典的体裁に近いもの、オリンピック開催をみすえ観戦ガイドを兼ねたキャンペンブック的なもの、オリンピックの理念を包摂したスポーツマンシップの物語（フィクションおよび実話）へと分化していく過程がみてとれるのを非常に興味深く感じています。それぞれに児童書としても「教育性」を指摘できるものの、前二者には知識教授型の「啓蒙性」を、後者には道徳的「教化性」というより微妙な色分けができるのではないかとことです。とくに、後者はスポーツの「神話」を表出させるべくスポーツマンシップやフェアプレイの概念のなかにどのように組み込まれていったのか、さらにこれらの概念が一般の児童文学において子どものスポーツを描いた作品にどのようにモチーフとして取り込まれ表出しているのか、そうしたモチーフとして拡散したオリンピックを児童文学から丹念にひろいだしてみることに関心がああり、それを時代区分、あるいは言説の変遷をみていくうえでの分析枠組みのひとつにすえることができましたと考えています。

最後に、水谷先生がコメントしてくださったように「不易にあたるものを継承していくために言説が担う語り部としての使命はかぎりなく重い」

ことに共感しつつこのコメントを終えさせていただきます。

国士舘21世紀オリンピック研究会コメント

清水 重勇

第一回にはぼくが、第二回に小石原美保氏がそれぞれしゃべった。主催者山本徳郎氏からの依頼により、今回、一旦しめくくりをするという趣旨で、小石原氏の発表に寄せられた森川貞夫氏、水谷豊氏、西村美佳氏の各氏のコメントに対して、第一回の演者であるぼくからコメントを書かなければならないのだが、発表は聞いていないし、送付されたテキストを読むかぎり、特に3氏のコメントに対して、当面、急を要する指摘などは思いつかない。

ここでは3氏のコメントへのコメントではなく、第一回と第二回をつなぐ道筋はどこにあるのか、折角の貴重な研究会でもあり、趣旨をいかして、ぼくの立場からとことん主観的に考えてみたい。その前にとりあえず、第二回の資料を読んだかぎりですら思いついたことを書いておく。

学会や研究会での発表も昨今、内容の項目や図表・画像などをスクリーン映像で示す方法が、とくに若い世代に愛用されている。文字そのものが色・形を伴う《書》に近い「モノ」（対象）の領域をともないながら記号＝意味の認知領域を包圍しているようなものだ。こうしたスクリーン・プレゼンテーションの技術を用いることで、発表者は何か表現の自由を手にしたかの錯覚に襲われるかもしれないけれども、それはモニター画面の表示が規格化している表現であり、そのかぎりでの《選択の自由》であるにすぎない。

文字と挿絵や写真画像の世界から動く映像の世界へとシフトしてしまった現在の情報社会において、オリンピック競技会に関する言説を含むさまざまな情報もまた、大規模かつ極端に規格化された認知の対象でしかなくなっている…、というの

が昨今の状況把握の常識となっている。しかし、選手のプレーの動きの迫真性を言葉(文字・音声)という道具で新聞・雑誌あるいは実況・実感放送という手段で伝えていた時代から、衛星中継テレビの現代にいたるまで、《事件》としてのスポーツ競技を言説化するプロセスそのものは、その根本において変わっていないと考えるべきではないか。メディア技術開発という面では、実況放送は1926年発足したNHKが1927年には学生野球定期戦の中継を手がけているし、さらに1年後の1928年、高柳健次郎によるテレビ受像の公開実験が行われ、1939年には、すでに東京オリンピックをターゲットにして、NHKのテレビ放映の実用化試験が始まっている。このように、スポーツはメディアの格好の対象となっていたわけであり、戦争などしなければ、もっと早くスポーツの大衆メディア化現象はすすんでいたにちがいない。見ると聞くでは大違い、というけれど、テレビといえども《見る》というのは現場ではなく、切り取られたシーンにすぎないのであるから、伝えるプロセスは根本において、現場に居合わせるプロデューサーなど人間の言語・思考慣行を回遊する《思考が生み出すモノ》であることにかわりない。

小石原氏の発表は「児童書」のジャンルでの日本の戦前戦後のオリビズムをスポーツ文学の立場から、現代(21世紀)の方向性について論評するものである。そこでは、第一回のぼくの発表と関連づけながら、「異なる文化圏のあいだに成立する対話、異なる世代間に成立する対話を、オリビズムについて語る、記述する、伝える、読む、理解する、共鳴するといった言説を介した実践の中で実現させることもクーベルタンの構想に含まれていたとすれば、それがどの程度まで実現されたのかを検証」するための一つのケースとして児童書の歴史が採用されている。そしてその落としどころは、文字ばなれ・メディア化の大衆文化状況におけるオリビズム媒体としての「言説化」(かならずしも児童書ということではないが)の

使命の再認識というところにある。

そこには定式化された現代メディア論の命題への依存がみられないだろうか? はたして、一般に信じられているように、現代のわれわれ日本人(日本文化、日本社会など)は文字から本当に離れているのだろうか? 文章による表現力が弱っているということではないのだろうか? 文章における創造の弱体化の口実として、メディアの簇生だされているだけではないのだろうか? 肝心なことが隠蔽されているのでは? と疑ってみるのも悪くない。現代は創造性の欠落した時代なのだ…と。

いわゆる「文字ばなれ」という現象とメディア化という現象は、かならずしも一義的な関係で結ばれてよいとは思われない。たしかに、読むより見る方が先であり、文字はその後追いの仕事にたずさわっている感なしとしない。でも、文字が持つ指示的(デジタル)な機能は、テレビの映像の情的な情報より明示的であり、文字はそこでは、やはり否定しえない独自の役割をはたしている。この意味においてこそ、小石原氏の結論である《言説によるオリビズムの再構築》は一層よく理解できるように思える。

第一回のときの質疑の中で、ぼくは「最近、スポーツ選手の言葉が変わってきた。昔とくらべて何かが変りつつある…」という意味のことを口にしたが、スポーツをやる人間の思考と、スポーツを大衆のために(あるいは大衆操作のために)開発・利用しようとする人間の思考は違うのではないか、違わなければおかしい…と考えたからである。スポーツ人が自らの手でつくっていく世界というものが必ずあるはずであるし、あるとすれば、それこそクーベルタンのオリビズムの中心線にぴったり合った世界であるはずだ。また、クーベルタンのオリビズムというものと、その後の継承されたオリビズムというものの違いについても、第一回のときはほとんど触れなかった。オリビズムの違いということと、スポーツ状況・技

術の違いということが混同されるおそれがある。IOA制作のクーベルタンの亡霊を登場させるビデオなどはその好例である。クーベルタンのオリimpiズムと現代オリimpiズムの違いは技術ではなく思想の違いなのであり、その第一は「普遍」的なものへの信頼なのだということを強調したつもりだった。小石原氏が指摘している通り、クーベルタン以後、継承された現代オリimpiズムは「多義性」をその特徴として生き続けているようだ。本来、普遍と多義（ないし多様）は反対概念ではないにしても、普遍という言葉の外にあるのではないか？この点では、小石原氏にも、オリimpiズム的普遍（変ったことじゃなくて変らぬこと）を児童書の中からつむぎだしてもらいたいところである。

クーベルタンが1901年に『公教育ノート』に書き、1919年に『スポーツ教育学』のほぼ半分をついやして叙述しているスポーツ史^(*)を読んでみたい。それはひとつのスポーツという主人公（「スポーツさん」）が登場する物語ないし小説のように書かれていることが分かってもらえるのではないかと思う。「言説化」というタームは、普遍主義や理想主義に潜む主観・主体を脱構築するために用いられるタームであるが、言説化といえども自然現象ではないし、言説化の「公害問題」みたいなことを言う人もまた主観・主体を脱しているわけではない。また、「文化」というタームにも十分な警戒が必要だろう、ということは発表

の中でも述べたけれども、文化と叫べば上記の主観・主体の問題が免責になるという風潮はいただけないと、ほくは考えている。文化は大衆という牛に引かせる鋤ではないだろう。スポーツを人間化するということがクーベルタンのオリimpiズムの重要な目的であるからには、現代において人間の変らぬ本性をスポーツが具現するような言説化に向かって行くべきではないだろうか。

クーベルタンの教育改革運動の一環としてのオリimpiズムは、20世紀初頭の学術や文芸の新しい芽生えや成果を慧眼によって取捨選択し、それとうまく適合するかたちで言説化されていった。文芸界・芸術界における刷新…、たとえば身体観の変化とスポーツ文学の台頭とか、絵画や建築の新風、学術界の変革…、たとえば人間学における進化論や発生的認識論、現象学、心理学…、歴史学、地理学などなど。クーベルタンの語りの中にその痕跡が見て取れる。そうであったとすれば、われわれ日本人の換骨奪胎の国民的習性を生かした21世紀のオリimpiズムへの企ては、おそらくクーベルタンがそうであったように、当該の時代における新しい文化の趨勢の中で慧眼を働かせて選択し、「いいもの」をうまく活かしながら構築されていくのではないだろうか？

(*) インターネット「しげさんのサイト」の【クーベルタン塾】ページに全訳がアップロードされている。www.shgshh.gn.to/shgmax/public_html/